

## 創立 30 周年特集

## &lt;品質工学会 30 周年記念寄稿&gt;

群馬県地域の草の根活動 GMC より  
30 周年記念号に寄せて

埼玉工業大学 河田直樹

品質工学会が30周年を迎え、研究会一同を代表してここにお祝いを申し上げます。GMC (Gunma Manufacturing Circle) は、久米原宏之氏 (当時群馬大学 教授) が中心となって2006年から始めた品質工学を中心とする研究会であり、16年目を迎える。

まだまだ未成熟な部分もあって、未だ非公認の研究会ではあるものの、主な活動内容は、群馬県と埼玉県の北部地域の産官学のメンバーが毎月第3土曜日に集まって、品質工学の事例を中心にもものづくりについてさまざまな技術情報交換や議論を行っている (2020年から現在までは新型コロナウイルスの感染対策として、リモートで実施している)。開催の当初は、群馬大学の久米原研究室の学生やその共同研究先の企業の方々が多数参加し、さまざまなテーマについて議論を行っていて、さながら1990年代後半の電気通信大学の矢野研究室に関わった多くの学会の皆様にご参加いただいた研究発表会や、2000年代前半の東京電機大学の矢野研究室の学生とその共同研究先の関係者が多数参加していたNMSのような雰囲気を持った研究会であった。

しかしながら、GMCでは2009年3月にそれまで参加していた学生が卒業したことでメンバーの大幅な減少となり、さらに前年のリーマンショックの影響もあり、企業の参加者も徐々に減っていき、その後の7~8年間は10名以下のメンバーで研究会を続けていた状況であった (私自身は遠く県外から参加を続ける状況であった)。このときは、研究会の存続には学生や若手技術者の存在が大きいと痛感した。

2010年代後半になると、埼玉工業大学に3名の会員がさまざまな経緯を経て次々と着任することとなり、各研究室の学生がGMCに参加するようになった。2018年の秋と2019年の春には、GMCの臨時会として状態監視技術交流会を開催し、埼玉工業大学の生産プロセス研究室と成形技術研究室の学生を中心に各自のテーマ発表を行った。この時開催した状態監視技術交流会の開催形式を、現在の学校教育委員会主催の学校交流会の参考にしている。

このように2006年~2009年ほどではないが研究会に活気が戻ってきており、あらためて学生の存在が大きいと感じた。

以上のように発足から今日に至るまで、GMCで議論したいくつかの主要なテーマは、これまでの発表大会での発表や学会誌への論文投稿なども行われ、中には品質工学会の賞を受賞するテーマもあり、一定数の成果を残してきたことを書き添えておく。

同じように、学会内における学生の存在の重要性は、学校教育委員会として2019年11月より開催している学校交流会を見ても明らかであり、品質工学会の今後においても、かなり重要であることがわかる。

GMCの16年は、そんなことを教えてくれた時間ではないかと思う。これからもGMCを盛り上げて存続させるとともに学会全体への貢献も高めていきたい。

以下にGMCを支えるメンバーからの30周年を迎える学会に対してメッセージを預かっているので、この場を借りて紹介したい (掲載は原稿受付順とし、敬称略とした)。